

<書 評>

Hanna Beate Schöpp-Schilling, editor;
 Cees Flinterman, associate editor.
*The Circle of Empowerment: Twenty-Five Years
 of the UN Committee on the Elimination of
 Discrimination against Women*
 (New York: Feminist Press, 2007, 392 p.)

軽 部 恵 子

本書は、女性差別撤廃条約の監視機関である女性差別撤廃委員会（Committee on the Elimination of Discrimination against Women: CEDAW）の委員および元委員らによる400ページ近い大作である。編者は、ドイツ出身で長年 CEDAW 委員を務めたショップ＝シリリング氏（Hannna Beate Schöpp-Schilling）と、オランダ出身の現委員で、マーストリヒト大学法学部（本書の執筆時はユトレヒト大学）で教鞭をとる国際人権法の専門家フリンターマン氏（Cees Flinterman）である。

3度目の世界大戦を防ぐため設立された国連は、その憲章第1条第3項で基本的人権と自由の尊重を規定した。そして、その趣旨は1948年12月の世界人権宣言、1966年の2つの国際人権規約に結実した。一方、法律上の男女平等が規定されても、事実上の男女平等の実現につながらない状況を打破すべく、1975年は国際女性年と指定された。同年にメキシコシティで開催された第1回世界女性会議では、女性の権利を包括的に規定する新たな国際条約の制定が決定され、1979年12月に国連総会で女性差別撤廃条約が採択された。今年は、同条約採択から30年にあたる。CEDAW は条約の効力発生後、1982年に第1回会合を開いた。

本書に対する賞賛は、国際人権法の分野で活躍する錚々たる人物たちから寄せられている。中でも、ニューヨーク大学法科大学院教授で、女性差別撤廃条約を

含む人権条約の研究で知られるアルストン氏 (Philip G. Alston), トロント大学法学部教授で、実践でも女性の人権尊重に長年貢献してきたクック氏 (Rebecca J. Cook) は、文字通りこの分野の「巨人」であろう。

本書の最大の特徴は、女性差別撤廃条約の国内実施状況を監視する委員たち (現職, 経験者の双方) が多数寄稿した点である。その内訳は評論ないし論文 (essays) を寄稿した者が19人, 個人的意見または回顧談 (personal reflections) を寄稿した者が23人である。日本出身の赤松良子元委員は、後者を寄稿した。また、国連事務局とくに女性の地位向上部 (Division for the Advancement of Women) の関係者が何らかの形で寄稿した。

国連の主要な人権条約には、今日までに20以上が採択されてきた。女性差別撤廃条約以外では、市民的及び政治的権利に関する国際規約 (自由権規約), あらゆる形態の人種差別の撤廃に関する国際条約 (人種差別撤廃条約), 拷問及び他の残虐な、非人道的な又は品位を傷つける取扱い又は刑罰の禁止に関する条約 (拷問等禁止条約), 児童の権利に関する条約 (こどもの権利条約) が、とくに人権保障の範囲が大きいものである。しかし、条約を監視する委員会の委員がここまで大規模かつ多人数で論文や回顧談をまとめて出版した例は他にない。

本書は、女性差別撤廃条約および選択議定書をテーマとする研究者にも貴重な資料と分析を提供している。これは、1989年から20年間 CEDAW 委員を務めたショップ＝シリリング氏が複数の論文を執筆したからであろう。また、国連総会に提出される報告書には決して含まれない、委員個人の経験や所感も収められた。これらの文章は、委員会の活動をより深く研究する上で、時代背景や国連内の状況をうかがわせてくれる。本書は、アカデミックな研究と現場の経験がほどよく混じり合う、バランスの良い内容に仕上がった。

本書の構成は、大きく6つの部分から成る。冒頭は、アナン事務総長 (当時) から CEDAW 委員会25周年に寄せられたメッセージ, 2人の編者からの謝辞, ジェンダー問題および女性の地位向上に関する特別アドバイザーの寄稿である。

次に、「生きている文書としての条約」と題され、ショップ＝シリリング氏が女性差別撤廃条約の性質と範囲を担当した。次に、ニュージーランド出身で、1993年から2000年まで CEDAW 委員を務めたカートライト氏 (Silvia Rose Cartwright) が、条約の解釈について自身の考えを述べている。ニュージーランドで裁判官を務める同氏は、女性差別撤廃条約選択議定書を制定する女性の地位

委員会（Commission on the Status of Women: CSW）作業部会の1998年会期で、参考人（resource person）として出席した人物である。次に寄稿したイタリアのコルティー氏（Ivanka Corti）は、1987年から2002年まで CEDAW 委員を、1993年から1996年に CEDAW 委員長を、1995年から1996年に人権条約委員会議長会議（The Meeting of Chairpersons of the Human Rights Treaty Bodies）議長を務めた。同氏の論文は、女性差別撤廃条約と国連の諸会議（1975年の第1回世界女性会議またはメキシコ会議、1993年のウィーン世界人権会議、および1995年の第4回世界女性会議または北京会議を含む）、専門機関、プログラム、基金との関係を記している。

驚くべきことに、コルティー氏がウィーン世界人権会議に参加した際、他の人権条約委員会議長とともに座ろうとしたが、CEDAW 委員長の席が見つからなかった。ようやく見つけた席は、なんと国内の人権委員会や NGO 代表たちの席の中にあった（p. 40）。当時、女性差別撤廃条約は効力発生から既に10年以上経過していた。1947年に経済社会理事会内に機能委員会として CSW が設立された一方、女性の問題が人権問題ではないという認識が作られ、周縁化したことは研究者が指摘している（阿部浩己『国際人権の地平』現代人文社、2003年、31頁）が、それを端的に示すエピソードである。1979年に女性差別撤廃条約が国連総会で採択されたことは人権の歴史で大きな1ページとなったが、委員会の任務が効率的に進められ、条約の国内実施の実効性をより高めるために、委員各氏、そして歴代委員長の献身的な努力があったのだらうと察せられる。

本書の構成の続きだが、「人権Ⅰ：包括的な挑戦」「人権Ⅱ：個別の挑戦」「委員会の任務」「残された課題と今後の道のり」に分かれている。中でも、「委員会の任務」は約400ページのうち約100ページを占めている。冒頭にショップ＝シリリング氏が「委員会の性質と任務」という論文を掲載し、続いて計12人の元委員および国連事務局関係者が個人的意見を寄稿した。各人2-3ページという短い回顧談の中に、委員会の初期や中期の苦勞から、締約国との建設的な関係作りなど、報告書からは必ずしも見えてこない現場の様子が語られている。

フリントマン教授は、女性差別撤廃条約選択議定書を制定する CSW の作業部会にオランダ政府代表として出席していた。その点について同教授は、単に「作業部会は非常にうまくいっていた」（p. 287）とのみ記している。作業部会の第3会期（1998年）および第4会期（1999年）に出席し、NGO に公開された

部分をすべて傍聴した評者としては、もう少し経緯を書いてほしかったが、元政府代表が政府代表間のみの議論を公開するわけにはいかないので、やむを得ないであろう。選択議定書の特徴に関する同教授の説明は詳細かつ緻密である。とくに、2000年12月に効力発生した選択議定書の個人通報について、受理可能性と本案審議を具体的な事例に即して分析した箇所は、研究者にはもちろん、選択議定書第2条に基づき通報をCEDAWへ送付できる人権NGOにとっても必読であろう。

巻末の参考文献一覧 (works cited) も大変貴重である。ここには、学術論文、著作にくわえ、国連とくにCEDAWが発行した各種レポートが掲載されている。国連ホームページにも検索機能は付いているが、キーワードで検索してもえてして膨大な数がヒットするため、効率よく重要文書を探せるとは限らない。これは、国連の文書が関連する以前の決議等を頻繁に引用するためでもある。一方、本書が集めた文献は、CEDAWのみならず、他の主要な人権条約の委員会に関する文書も入っている。また、1989年から2008年までCEDAW委員を務めたシヨップ＝シリリング氏が掲げた、という事実が文書の重要さを保証する。なお、国連自身が編纂した選択議定書制定会議に関する文書は、Division of the Advancement of Women, Department of Economic and Social Affairs. *The Convention on the Elimination of All Forms of Discrimination against Women. Optional Protocol: Text and Materials* (New York: United Nations, 2000) を参照してほしい。

最後に、シヨップ＝シリリング氏の膨大な知識と強力なイニシアチブなくして、本書は誕生しえなかった。また、本書が誕生しなければ、女性差別撤廃条約が歩んできた25年間の歴史、とくに人権の国内実施を監視する委員会の取り組みが世界の人々の目に触れることもなかった。女性差別撤廃条約を長年研究してきた者として、同氏に心からの尊敬と深い感謝の念を捧げたい。